



Title	貴志雅之先生のご退職によせて
Author(s)	渡邊, 克昭
Citation	大阪大学英米研究. 2021, 45, p. 36-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99456
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

貴志雅之先生のご退職によせて

渡邊 克昭

貴志先生のご退職によせて一文を書かせていただく日がかくも早く来るとは思いませんでした。長年親しくお付き合いさせていただいてきましたので、来年から先生のおられない英語専攻を想像するのはなかなか難しいところです。いわゆる「貴志ロス」がこれからもずっと続きそうです。それほど先生は、英語専攻にとって大きな存在でした。いつも元気溌剌、責任感が強く、何事にも真剣勝負で意欲的に取り組まれるお姿は、そばで見ても実に頼もしいかぎりでした。何が起こっても、貴志先生がおられるかぎり大丈夫だと、同僚の教員や学生たちにとっても大いなる安心感を与えてこられたように拝察いたします。

私が先生のことを知ったのは大学院生時代に遡りますが、出身大学や大学院が異なるにも関わらず、どういうわけかウマが合うところがあり、学会活動を通じて先生の学問的なご見識とお人柄に惚れ込んで、恩師の故田川弘雄先生の後任にお迎えできたのは、私の人生においてこのうえない喜びでした。今は亡き内田憲男先生と一緒に、宝塚に赴き、外大にお越し願えないかと先生にお願いした時のことを昨日のことのように覚えております。既に母校の関西大学からもお声がかかっていたにも関わらず、ご快諾いただき、その瞬間から輝かしいさと未来が開けたような気がしたものです。以来、演劇がご専門の貴志先生と小説が専門の私は、まさに二人三脚で互いに協力しつつ、本学においてアメリカ文学・文化の研究と教育に邁進してきました。貴志先生とのシナジー効果は著しく、1足す1が3にも4にもなって、これまで実に多くの優秀な院生たちが先生の薫陶を得て学会に華々しくデビューし、あちこちで専任職を得ているのを見ると実に感慨深いものがあります。

研究者として常に学会の第一線で大活躍されてきた貴志先生の同僚であることは、私にとって無上の喜びであり、日本アメリカ文学会編集委員会、代議員会、本部事務局、日本英文学会の編集委員会などで、ともにお仕事をさせていただいたこと、それから幾度も学会のシンポジウムで一緒に登壇させていただいたことなど、楽しい思い出は語り尽くせぬものがあります。

ときおり学会などで他大学の先生とお話ししますと、同僚の先生と虚心坦懐に話す機会がほとんどない、ましてや飲みに行く機会などないという方が結構おられるのですが、これは私たちにとっては想像を絶することでした。というのも、私たちは、コロナ禍が起る前は、毎週水曜日授業後、篠山に住んでおられる先生を拙宅の近くの箕面駅まで車でまずはお送りして、そのあたりでアルコールを適宜補給しつつ、親しく定例「懇親会」を開催していましたからです。今日のゼミはどうだったかとか、あの学生は最近頑張っているなとか、シンポのアイディアがあるのだけれどもというような話から始まって、家族や趣味のこと、あらゆることを胸襟を開いて話していると、いつもあつという間に至福の時間が経っていました。またカラオケにもよくご一緒させていただきました。今はコロナ禍で自粛中ですが、何かと思い出すにつけ、先生の軽快な歌声がいつも心の中で蘇ります。これまた朗々とした美声の持ち主である岡田先生、上田先生、加藤先生も交え、また皆さんで熱唱する機会があればと願うばかりです。

最後になりましたが、貴志先生は、昨年出版されましたご著書、『アメリカ演劇、劇作家たちのポリティクス－他者との遭遇とその行方』の「あとがき」のなかで、一年の授業の締めくくりとして教え子に必ず語りかける話として次のように述べられています。「みなさんは、生きていくなかで本当に魅力的だと思える人に出会います。・・・ここで言う魅力的な人とは、その人の話を聞いているだけで、自分で何かをしてみよう、してみたいと思えるようになる。その人の話を聞いていると、何か幸福感に似た感情とともに、胸が高なり、心が動き、自分でも知らない、意識したことのない力が湧き出るような思いがする。自分の道を探して、歩き出したい衝動にかられ

る。人にそのような思いをさせる、言わば光り輝くような人です。」われわれにとっては、まさに貴志先生その人こそが、そのような「光り輝くような人」であったことは言うまでもありません。先生のご退職に際し、学生思いの先生が放ってこられた人間的な魅力の光の輪、共感の輪を、これからも英語専攻として引き継ぎ、確実に次代にバトンタッチしていくと決心を新たにした次第です。まことに長いあいだご苦労様でした。これからも、どうかお元気でお過ごしください。また、お酒を酌み交わしてお話しする機会を楽しみにしております。